

無外如大禅尼の生涯とその遺徳を伝える

中世日本研究所 研究室内長 パトリシア・フィスター

# 鎌倉期の特筆すべき尼僧

## 無学祖元の法脈継承の弟子



「無外如大尼像」臨濟宗相国寺派 眞如寺(京都市北区)蔵

中世日本研究所の女性仏教文化史研究センター(京都)では、近年、無外如大禅尼(1223-98)に焦点を当てた調査研究プロジェクトを行っている。如无大尼は高名な中国僧、無学祖元(仏光国師、1226-86)に師事した鎌倉時代の尼僧である。無学祖元は如大尼を法脈継承の弟子として認め、頂相画とともに、自らの衆徒を譲った特筆すべき尼僧だった。その頂相画は残されていないが、無学祖元の如大尼への讃が『仏光国師語録』に書き記されている。

如大大師 讚讃 景愛寺長老  
入仏三昧魔王遠却 入魔境界仏亦不背、  
藕糸窠裏恢拓乾坤、石火光中定奪  
皂白、  
塗毒鼓声震大千、摩醯眼電光閃爍、  
南北東西仏手驢脚、未後一句分付  
無著(筆者注・無著は如大の別呼

称と思われる) 無外如大尼の若年の頃については詳らかでないが、現存する如大尼についての記述は後世になって書かれたもので、少なくとも1人、ないしは2人の別の尼僧が如大尼に関する物語に混在し、今に伝わっているとされる。最も信頼できる史料は無学祖元の語録に

# 女性のための景愛寺開山

## 京都の法灯、今なお守り継ぐ

記されたもの、もう一つの重要な資料は、現存はしていないが如大尼の頂相画に書かれていた絶海中津(佛智廣照国師、1334-1405)が書き残した拈香である。1398年に如大尼の百年遠

某機辯縱横高提、常照(無学祖元)心印。  
知見廣大新開、景愛靈場。  
其門庭施設峭峻、其胸次波瀾汪洋(佛智廣照国師、1334-1405) 取則雄峯二重、叢席。回風

忌が行われたことを証するもので、景愛寺の開山、無外如大禅尼へ捧げられた「景愛尼寺開基如大禅師百年忌拈香」である。  
景愛尼寺開基如大禅師百年忌拈香  
總持曾續少林芳。無著重輝佛日光。  
争似吾師遺「景愛」。到今草木發天香。

徳山二而置「法堂」。落落玄機脱「略竇白」。茫茫苦海甘作「舟航」。用鍊磨本分「質料」。振末山已墜「玄綱」。以「言語」言。聖却喬梵鉢提「片舌」。以「毒攻毒」。爛「盡舜舜多神肝」。可謂行能「解解能稱」行。行解相應。心外無「法」。法外無「

# 論

越してたゞされる。 無外如大禅尼が開山である京都の景愛寺は、女性のための修練と受戒のために創建された広大な寺院で、唐時代の百丈懷海禅師(720-814)の規律に基づいて厳格な規則を確立したと伝えられている。景愛寺のネットワークは徐々に拡大し、多い時には15以上の塔頭寺院三院を擁していた。後に尼寺五山の七、最高位に位置づけられた景愛寺は、将軍により選ばれた高貴な女性の住持によって率いられ隆盛した。景愛寺は応仁の乱後の1483年に焼失し、再建されることはなかったが、京都の尼門跡寺院(大聖寺、宝鏡寺、宝慈院)が、景愛寺の法灯を今なお守り継いでいる。また、深



パトリシア・フィスター 本美術史専攻。国際日本文化研究センター名誉教授。著者に「尼門跡寺院の世界―皇女たちの信仰と御所文化」共著、「尼門跡と尼僧の美術」近世の女性画家たち 美術とジェンダ―」など。

心。心法雙忘。七十六季化權奄載。三千里履塵化。無無三所從。一法無跡。昔不二會生今不亡。時移物換百年後。正體堂堂不覆藏。更有「摩醯目眼」。一輪紅日三傳桑。 この追悼文の中で、絶海中津は、禅の尼僧として、また仏法を師として如大尼を称賛し、彼女を模範的な4人の中国の尼僧(總持、無著、一妙總、劉鐵齋、未山)と同等に高みに位置づけている。彼女はまた、男僧の禅の修行精神を積極的に維持したとして称賛され、最終的には男女の性を超越したとされる。